

人とのまじわり（森林・林業の普及）

森林・林業振興の担い手として期待される若い感覚を持った林業経営者並びにグループ組織等の育成をめざした「新しい林業経営者養成事業（人づくり研修）」が実施されて久しくなります。

この研修で養成された山村青年指導者（林業士）は県下各地で、地域林業振興のリーダーとして活躍しています。しかしながら、これら山村青年指導者たちの活動の状況は必ずしも十分ではなく、このため「人づくり研修」の見直しをしなければならぬ時期にきていると思います。

森林・林業をとりまく情勢の変化は言うまでもなく、森林に対する要請や、林業にかかわる生産活動などが国民的感覚、或いは視点でとらえられ、しかもそれが多様化しています。これに対応する「人づくり研修」は、従来のような一般的なものでなく、専門的な分野を重点的に取り入れた、一芸に秀でた者を育てる研修が望まれる時代ではないかと思っています。そのために行政は研修に対しどのような方向づけをしたらよいか判断を迫られています。勿論、普及指導職員も、施策（行政）と実行（林家）のパイプ役を務め、これが円滑に通じるため努力をしているわけですが更に深く広く進めるための活動が必要ではないかと思っています。

そこで「普及とは人とのまじわりから始まる」という原点にかえり意志の交流について考えてみたいと思います。

「人と人とのまじわり」を通して多くの経験を積み、多面的な思考能力を養う教育が重要であることは言うまでもありませんが、普及活動の中に「情報の伝達」という手法があります。今、最も重要且つ緊急度の高いものがこれではないかと思っています。しかし現在は情報過多の時代と言われ森林・林業に限らず社会情勢を含めたあらゆる情報が飛び交う中でその情報について、最も「林家」が必要とするものを適切な判断によって速やかに収集し伝達することが望まれます。

あまりにも多い情報に、飽食ぎみとなり、かえ

って何も知らずにいることもあります。郵政省が発行する「通信白書」によると流通している情報の92.8%は無駄にしているとされています。

例えば、人づくり研修などで感じたことは、我が当然理解していると思った施策、或いは事業についても関係者に浸透していないことがあり、これらは施策の多様化と情報の氾濫にもよりますが、そこに合った方法で伝達がなされなかったことが大きな原因ではないかと思います。

ひとくちに情報の伝達と言ってもむずかしいものがあり唯、伝えるだけでは伝達にはなりません。そこで「説得」と言う能動的な手法で、知らせる努力が重要であり、また、知る努力も大切であります。文書や、チラシなどのメディアを使つての説得も良い方法ですが、最も大切なことは、コミュニケーションではないかと思っています。そこには「人と人とのまじわり」があり、直接感情をまじえた交流が生れてきます。言うなれば普及指導職員は森林・林業を支えている（或いは支えてきた）「林家」に接する機会を多く持ち、密着したコミュニケーションを持つことではないかと思っています。人づくり研修において研修生の持つ感想の中にも同じことがひとつあります。それは情報化時代にふさわしく「人と人とのふれ合いの場へきて良かった」ということであります。

今日の山村林業の変貌は高度経済成長という外的条件によって動かされたものであり林家の主体性による山村内部の力によってもたらされたものではありません。それだけに問題も多く、新しい展望を適切に見出すことがむずかしく、そんな状況の中で「林業経営者育成事業」が実施されているわけであります。

教育という言葉は様々に使われていますが、広い意味でコミュニケーションのひとつと理解し「人と人とのまじわり」「人と人とのふれあい」の大切さと、これが普及の原点であることを再考したいものです。（指導部 白沢）